



バーゼル銀行監督委員会による ディスカッション・ペーパー 「気候関連金融リスクの管理と監督の向 上のための気候シナリオ分析の役割」の 公表について

2024年6月
金融庁／日本銀行

* 当資料は、バーゼル銀行監督委員会の公表文書の内容への理解促進の一助として、作成されたものです。公表文書の内容については必ず原文を当たって御確認下さい。当資料の無断転載・引用は固くお断り致します。



目次

1. 背景・経緯

2. ディスカッション・ペーパーの概要

(1) バーゼル枠組みにおける現在の目的

(2) 気候シナリオ分析(CSA)の主な特徴及び
用途別の考慮事項

(3) 質問事項

3. 今後の予定

1. 背景・経緯

1. 背景・経緯（1/2）

- バーゼル銀行監督委員会（以下、バーゼル委）は2022年に、気候関連金融リスクの管理に係る実務の改善と国際的に活動する銀行及び当局のための共通のベースラインの提供を目的として、「気候関連金融リスクの実効的な管理と監督のための諸原則」¹（以下、原則）を公表した。
- 同原則では、シナリオ分析の分野が変化を続けており、特に気候科学の進歩に伴い、実務面での迅速な進展が期待されるとしている。このため、バーゼル委は、他の国際的な会議体（NGFS等）で進行中の作業を基礎として、銀行による気候シナリオ分析（以下、CSA）の利用に焦点を当てる補完的な作業を行っている。
- また、2023年には、原則の実施状況のモニタリング²を開始。本作業では、CSAのフォワードルッキングなツールとしての重要性が確認された。これと同時に、各法域や銀行により異なる用途・手法でCSAが利用されていること、データ入手可能性や計算手法の不確実性が制約要因となっていることも示された。

1: Basel Committee on Banking Supervision, Principles for the effective management and supervision of climate-related financial risks, June 2022, www.bis.org/bcbs/publ/d532.pdf.

2: Newsletter on the implementation of the Principles for the effective management and supervision of climate-related financial risks, Nov 2023, www.bis.org/publ/bcbs_nl33.htm

1. 背景・経緯 (2/2)

こうした背景・経緯のもと

- バーゼル委は今般、CSAに関するバーゼル枠組みにおける目的、主な特徴と用途別の考慮事項を取りまとめ、ディスカッション・ペーパーの公表を行った。本ディスカッション・ペーパーでは、CSAの役割や課題等について、広く関係者の意見を求めている。
- バーゼル委はこれらの意見に基づき、金融の安定性を高める目的で、グローバルに銀行の規制、監督、実務を強化するというマンデートを追求すべく、補完的な作業を行うことを検討している。

(注1) CSAと伝統的なストレステストは、シナリオやリスクモデルなど類似した枠組みを持つため、本ディスカッション・ペーパーではストレステストにも多く言及している。しかし、両者で利用するシナリオは異なり、CSAは移行リスク・物理的リスクから生じる経済の構造的・短期的変化に焦点を当てる一方、伝統的なストレステストは一時的なマクロ経済・金融ショックに伴う景気後退など、「深刻だが起こり得る」シナリオに基づく影響を検証するものである。

(注2) 本文書内では、気候ストレステスト(以下、CST)を、「深刻だが起こり得る」シナリオに基づくCSAと位置付けている。

1. 背景・経緯

(参考) ディスカッション・ペーパーの概観

チャプター	内容
1. イントロダクション	
2. バーゼル枠組みにおける現在の目的	- リスクの特定 - リスク管理プロセス - 内部・監督上の資本と流動性の充実度評価 - ビジネスモデルのレジリエンス評価及びビジネス戦略構築
3. 気候シナリオ分析(CSA)の主な特徴及び用途別の考慮事項	- 主な特徴 モチベーション、包括性、妥当性、一貫性、透明性、扱いやすさ、比例適用 - 用途別の考慮事項 標準化の程度、時間軸、シナリオの厳しさ、ベースラインの選択、粒度、バランスシートの前提条件、分析の枠組み
4. ディスカッション・ペーパーへの意見	



2. ディスカッション・ペーパーの概要

(1) バーゼル枠組みにおける現在の目的

2. ディスカッション・ペーパーの概要

(1) バーゼル枠組みにおける現在の目的(1/5)

- バーゼル委は、2022年の「原則」の公表を通じ、プリンシプル・ベースのアプローチで気候関連金融リスクに関する銀行のリスク管理と当局の監督実務の改善を図ってきた。本原則は、比例適用されることを意図しているが、特にCSA及びCSTについては、国際統一基準行及びバーゼル委メンバーの監督当局への適用を視野に入れている。
- バーゼル委は、原則とCSAの関係性を基に、CSAの主な目的を下記4つに分類している。
 - (a) リスクの特定
 - (b) リスク管理プロセス
 - (c) 内部・監督上の資本と流動性の充実度評価
 - (d) ビジネスモデルのレジリエンス評価及びビジネス戦略構築
- 上記4つの分野は、それぞれ相互作用があり、気候関連金融リスクに対処するための金融機関の取組みをサポートするものである。

2. ディスカッション・ペーパーの概要

(1) バーゼル枠組みにおける現在の目的(2/5)

(a) リスクの特定

- 原則は、銀行が、その財務状況に重大な影響を及ぼす可能性のある全ての気候関連金融リスクを特定することが期待される点を強調している。
- CSAは、どのエクスポージャーがどの気候リスクドライバーに対して脆弱であるかの特定に役立ち、複数の同時ショックやその他複合リスクの検証を容易にする。これにより、銀行は、長期的な戦略を様々なシナリオ経路と結び付け、気候関連リスクのドライバーが全体的なリスク・プロファイルやビジネスモデルのレジリエンスに及ぼす影響を評価することが可能となる。
- 監督当局は、銀行がポートフォリオレベルでリスク集中を特定、測定、モニター、コントロールする能力を備えることを確認することが期待される(Supervisory Review Process 30.15 (2))
- CSAは集中リスクの特定・評価にも有用である可能性がある。
 - ✓ 移行リスクに関しては、個々及び特定のエクスポージャーグループに対する移行リスクドライバーの潜在的な伝播チャネルの影響を特定及び測定することで、エクスポージャーが移行リスクドライバーに相関する程度を評価する。
 - ✓ 物理的リスクに関しては、地域特有の理由で発生する危険性や慢性的な影響における集中リスクを特定するという課題に対処するのに役立つ。

2. ディスカッション・ペーパーの概要

(1) バーゼル枠組みにおける現在の目的(3/5)

(b) リスク管理プロセス

- CSAは、以下を含む一連のリスク管理プロセスにおいても有用となる。
 - ・ リスク評価のためのデータ及び手法における重要なギャップの是正
 - ・ 一連の「深刻だが起こり得る」気候シナリオの下での潜在的損失の評価
 - ・ エクスపోージャーの価格付け(プライシング)
 - ・ エクスపోージャー限度額またはリスク限度の決定
 - ・ モニタリング
 - ・ エクスపోージャーの制御
- CSAは、銀行が、時間経過に伴い生じるエクスポージャーの変化を評価することに加え、リスク許容度を超えるリスクの軽減を検討することにも役立つ。
- 効果的なリスク管理のためには、事業戦略やポートフォリオ戦略に関連するリスクを理解し、潜在的なリスク軽減策をとるタイミングを評価するために、より長い時間軸に基づく評価が必要となる場合があり、CSAはこれらの考慮事項を検証するために有用。

2. ディスカッション・ペーパーの概要

(1) バーゼル枠組みにおける現在の目的(4/5)

(c) 内部・監督上の資本と流動性の充実度評価

- CSA、特にCSTは、銀行が実施する資本・流動性の充実度評価において、気候関連金融リスクが適切に反映されていることを確認するのに役立つ可能性がある。
- 既存の監督枠組みにおいて、監督上の評価プロセスは、銀行と監督当局間の活発な対話を促すことを目指しており、資本不足となった場合、または資本不足の蓋然性が特定された場合には、資本の回復または資本不足への対処のために措置を講じることができるようになっている。
- 銀行と監督当局間の活発な対話を通じて、気候関連金融リスクが資本・流動性充実度の評価プロセスにどのように組み込まれているかを把握することができる。

2. ディスカッション・ペーパーの概要

(1) バーゼル枠組みにおける現在の目的(5/5)

(d) ビジネスモデルのレジリエンス評価及びビジネス戦略構築

- CSAの結果は、移行に関する銀行の戦略やリスク管理へのインプットとなり得る。その結果、銀行のリスク管理プロセスに反映され得る。
- 長期シナリオは、低炭素経済への移行やテールリスクを吸収するための保険の利用が中断される可能性など、経済構造の変化が銀行の収益性や成長見通しに及ぼす潜在的な影響を研究するために用い得る。
- 短期シナリオは、例えば政策や規制の変更などによる短期的な影響（3～5年）を持つショックから生じる、より差し迫った経済・市場環境の変化に対する銀行の脆弱性を評価するのに役立つ。
- いずれの分析も補完的なものとみなすことができ、低炭素経済への移行や気候変動の物理的影響に伴うリスクとビジネスモデルの潜在的な変化の両方に備えるために、銀行が実施する内部ビジネス戦略やリスク管理プロセスに組み込む必要がある可能性。

2. ディスカッション・ペーパーの概要

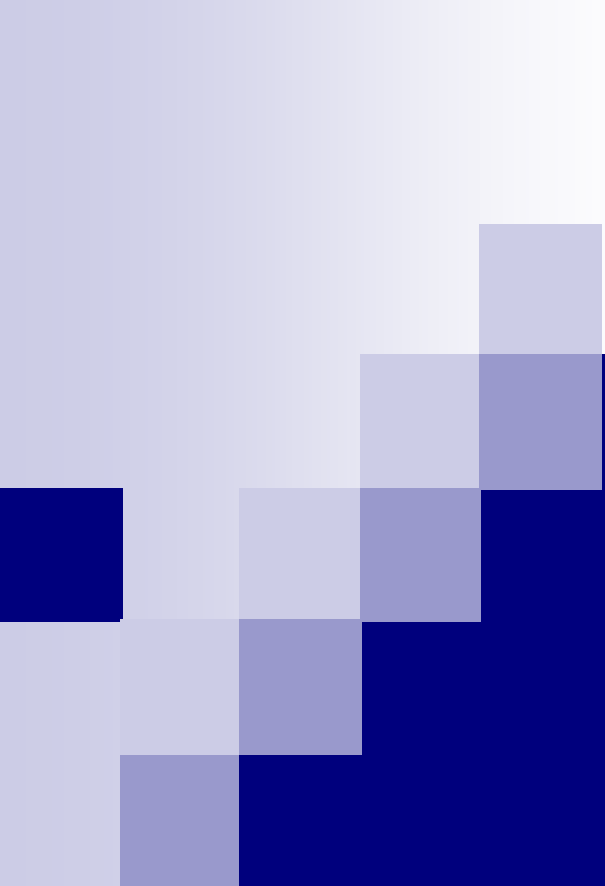
(参考)原則の内容

✓ シナリオ分析の利用について明示的に記載があるもの

原則	内容
原則12	適切な場合には、銀行はシナリオ分析を活用し、起こり得る一連の気候関連の様々なパスウェイ(経路・道筋)に対するビジネスモデルと戦略のレジリエンスを評価し、気候関連リスクのドライバーがリスク・プロファイル全体に与える影響を判断すべき。その際、関連する一連の計測期間における信用・市場・オペ・流動性リスクのドライバーとして、物理的リスクと移行リスクを考慮すべき。
原則18	当局は、気候関連リスクのシナリオ分析を利用して、重要なリスク要因やエクスポージャーのサイズ、データ・ギャップを特定し、リスク管理手法の適切性を銀行に通知することを検討すべき。また、深刻だが起こり得るシナリオ下での企業の財政状態を評価するために、気候関連リスク・シナリオ分析の利用を検討することもできる。当局は、必要に応じて、これらの結果の開示を検討すべき。

✓ 気候関連金融リスクの管理について記載があるもの

原則	内容
原則5	銀行は、気候関連金融リスクを特定・定量化し、妥当な時間軸にわたって重要であると評価されたリスクについては、適切な場合にはストレステストプログラムを含め、内部の資本及び流動性の充実度の内部評価プロセスに織り込むべき。
原則9	銀行は、気候関連金融リスクのドライバーが、自らの市場リスクポジションに及ぼす影響を理解し、市場リスク管理のシステムとプロセスが重大な気候関連の財務リスクを考慮することを確保すべき。
原則15	当局は、銀行が、気候関連金融リスクのドライバーのリスク・プロファイルへの影響を定期的に特定・評価する程度を決定し、信用・市場・オペ・その他のリスク管理において、重要な気候関連金融リスクが適切に考慮されているかを確認すべき。また、銀行が、適切な場合に、シナリオ分析を適用しているかを判断すべき。



2. ディスカッション・ペーパーの概要

(2) CSAの主な特徴及び用途別の考慮事項

2. ディスカッション・ペーパーの概要

(2) CSAの主な特徴及び用途別の考慮事項

- バーゼル委は、CSAに係る共通の実務を進展させるために、銀行・監督当局が実施するCSAが備えるべき特徴と用途別の考慮事項を暫定的に特定。

CSAの主な特徴
モチベーション
包括性
妥当性
一貫性
透明性
扱いやすさ
比例適用

CSAの用途別の考慮事項
標準化の程度
時間軸
シナリオの厳しさ
ベースラインの選択
粒度
バランスシート的前提条件
分析の枠組み

2. ディスカッション・ペーパーの概要

(2) CSAの主な特徴(1/5)

モチベーション — Motivation

- CSAは、明確に表現され、公式に定められた目的を持つべきである。CSAのモチベーションは、シナリオの設計、CSAの特性と範囲、モデル作成枠組みの開発、及び結果の活用に繋がる重要な機能である。これらの目的は、枠組みの開発を推進し、適切に文書化され、すべての関連する利害関係者に明確に伝達されるべき。

包括性 — Comprehensiveness

- CSAは、健全なリスク特定プロセスによって特定された重要かつ関連するリスクの評価を可能にし、明示されたCSAの目的と整合的であるべき。CSAは、理想的には、対象となる金融機関の性質及び構成又はエクスポージャーの種類を考慮して、目的の範囲内で特定されたすべての重要なリスクを捕捉すべき。

2. ディスカッション・ペーパーの概要

(2) CSAの主な特徴(2/5)

妥当性

— Plausibility

- CSAで設定するシナリオは、現在は起こりそうもないように見えるが、気候変動との関連で起こり得る極端な事象を含む、もっともらしい将来の状況・潜在的な現実世界の事象を反映すべき。
- シナリオ及び枠組み内の前提条件は、関連する科学、技術及び経済に関する文献に明確に基づくべき。これは、既存のデータ又はモデル作成上の課題のため単純化・省略された前提条件が使用される場合においても同様。
- シナリオの前提条件及びその理論的根拠は、特に科学的及び技術的前提条件について、信頼できる専門家から入手可能な最新の情報を反映すべきであり、厳密な分析によって裏付けられるべき。同様に、モデル作成における前提条件は、シナリオによって分析された経済及び気候条件の構造変化を反映するため、過去の関係性がどのようにもっともらしく変化するかを考慮すべき。

2. ディスカッション・ペーパーの概要

(2) CSAの主な特徴(3/5)

一貫性

— Coherence

- シナリオ設計、リスク分析、モデル作成及び全体的なCSAの設計を含むCSA一式は、気候シナリオ内、及びシナリオを結果に変換するために利用されるプロセス全体にわたって、内部的な一貫性を示すべき。
- 技術進歩、人口動態、気候の影響及びマクロ経済要因に関する前提条件は、シナリオとモデルを通して、内部的な一貫性を示すべき。
- 気候関連リスクのドライバーから得られる経済・金融変数の一貫性については、気候変動に関する技術の変化及び科学的根拠の勘案を含めて、特別に注意が払われるべき。

2. ディスカッション・ペーパーの概要

(2) CSAの主な特徴(4/5)

透明性

— Transparency

- 気候シナリオは、アウトプット、前提条件及び不確実性を含め、十分に透明性を備え、関連する利用者がアクセス可能であるべき。
- シナリオの構成要素においては、定量的結果の前提条件及びドライバー、並びにシナリオ内の変数の観測された経路について、経済的又は財務的根拠によって裏付けられた、シナリオ間の差異を簡潔に説明すべき。
- 主要な前提条件及びモデル作成アプローチは、銀行の経営陣や監督当局にとって明確かつ理解可能であるべき。関連するガバナンスやモデルリスクの管理のために、CSAの結果が主要なリスクドライバー及び波及経路に明確に帰属するよう、リスク分析モデルは透明性をもって設計されるべき。不確実性の原因に関する詳細を伴うべき。

2. ディスカッション・ペーパーの概要

(2) CSAの主な特徴(5/5)

扱いやすさ — Tractability

- CSAの枠組みを開発する際には、柔軟性と再現性を持つように努める必要がある。シナリオ開発者は、変化する運用環境に、シナリオを柔軟に適応させることができる必要がある。
- 気候関連金融リスクによるショックは、銀行や監督当局が使用する経済・金融変数に、再現可能な形でマッピングされ、適切な場合には過去の一連の変数が提供されるべき。また、可能であれば、シナリオで示された影響の大きさは再現可能であるべき。

比例適用 — Proportionality

- CSAの深度と粒度は、リスクの重要性に比例すべき。また、すでに確認されている重要性の範囲に応じて、組織とその能力に比例したものであるべき。
- シナリオと分析枠組みの両方の設計では、対象となる金融機関、ビジネスライン、セクター又は地域の性質と構成を考慮すべき。

2. ディスカッション・ペーパーの概要

(2) CSAの用途別の考慮事項(1/7)

標準化の程度 — Degree of standardisation

- CSAの標準化には、下記の事項が含まれ得る。
 - ・ 共通の気候リスクシナリオ式の提示
 - ・ 特定のシナリオ作成者からのシナリオの活用
 - ・ 特定のシナリオ変数の使用の要求
 - ・ 必要なデータ項目の導入
 - ・ 特定の資産クラス、セクターまたは地域の選択
 - ・ モデル作成の技術を規定
 - ・ 特定のデータ出力の要求
- CSAの目的の中で、採用されるカスタマイズの程度、その決定を行う際に行われたトレードオフについて議論され組織内で共有されるべき。
- 監督上のCSAには、目的に応じて、個別の銀行が実施するもの(ボトムアップ)と、監督当局が実施するもの(トップダウン)の2種類がある。
- ✓ ボトムアップ型のCSAは、各銀行のリスク・プロファイルに合わせて調整されるが、銀行間での比較可能性が低く、より資源集約的となり得る。
- ✓ トップダウン型のCSAは、より標準化され、銀行間での比較が容易であるが、個別の銀行のリスク・プロファイルに見合っていない可能性がある。

2. ディスカッション・ペーパーの概要

(2) CSAの用途別の考慮事項(2/7)

時間軸

— Time horizons

- シナリオが予測される、及び/又は分析が実施される期間は、評価の目的によって決定される。
- ✓ 急性の物理的リスクが顕在化した場合や政策上のショックのような一過性のショックを分析する場合は、短期の時間軸が有用。銀行が組織レベルでリスクを軽減し、監督当局が短期の脆弱性に対処するために重要となり得る。
- ✓ 物理的・移行リスクに伴う長期の構造変化に対する既存の戦略やビジネスモデルのレジリエンスを評価する場合は、長期の時間軸を用いる必要。
- CSA・CSTに関する重要な考慮事項は、実効的なリスク・エクスポージャー（すなわち、エクスポージャーの満期）及び予想されるリスクの具体化（すなわち、ショックの発現）の両者に関連する時間軸が、目的と整合的であること。
- 多くのリスクベースでのツール及び評価は、一般的にエクスポージャーの満期及び性質を反映する時間軸を必要とする。

2. ディスカッション・ペーパーの概要

(2) CSAの用途別の考慮事項(3/7)

シナリオの厳しさ — Severity of scenarios

- CSAにおいて用いるシナリオの厳しさには幅がある。
- ✓ これまでは、長期的な気候リスクドライバーによる、一般的なマクロ経済や金融環境を説明するシナリオに焦点を当ててきた。
- ✓ 最近では、気候リスクドライバーによるテールリスク事象を説明する短期的なシナリオに注目が集まっている。
- ✓ 両者とも重要であり、目的に従い、様々な厳しさを持つシナリオ一式が必要となり得る。
- また、2つ以上のリスク(複合リスク)の相互作用が、個々の影響よりも大きな影響をもたらす可能性がある点については、CSA、特にCSTで議論がなされている。複合的リスクとその累積的な影響を捕捉するために複数のショックを使用することは、テールリスクを適切に反映するシナリオを構築するために必要となり得る。

2. ディスカッション・ペーパーの概要

(2) CSAの用途別の考慮事項(4/7)

ベースラインの選択 — Baseline selection

- CSAはストレステストの枠組みに従って運用されることが多い。ストレステストでは、特定のベースシナリオを想定する。伝統的なストレステストの文脈においては通常、ベースラインシナリオは、他のシナリオとの比較の基礎となる、(ストレスがかかっていない)中心的な予測である。そのため、伝統的なストレステストからCSA及びCSTに移行する際、移行リスク・物理的リスクによる影響が多様であるため、ベースラインの選択という課題に直面する。
- この点、CSAでは移行リスクと物理的リスクを除外するベースラインはない。更に、これらのリスクを含むベースラインには、ある程度のストレスが組み込まれているため、得られた結果が過少となる可能性がある点が、既存の枠組みを適用させる上での課題。
- 事実上、一部のCSAは伝統的なストレステストのベースラインを選択しているが、これは、通常気候変動の影響を組み込んでいないため、仮想的なものである。現実的な選択肢には、これ以上の気候政策対応がない場合の最も蓋然性が高いと考えられるシナリオが含まれる。

2. ディスカッション・ペーパーの概要

(2) CSAの用途別の考慮事項(5/7)

粒度

— Granularity

- 伝統的なシナリオ分析(特に資本ストレステスト)では、マクロ経済レベルのシナリオを検討する傾向があり、リスクドライバーは失業、インフレ、金利や株価等の重要なマクロ経済変数(MEV)へのショックとして伝達される。
- 一方で、CSAは、例えばエネルギーシステムの移行、サプライチェーンの変化、保険の利用可能性の低下といった構造変化に明示的に関係していることが多い。その結果、CSAのシナリオ及びエクスポージャーデータは、経済的な関係の変化を適切に評価するために、より粒度の高いものを必要とし得る。
- 十分な粒度のデータは容易にアクセス可能なフォーマットで利用できない可能性があるため、不足するデータについては、代替値の活用も検討考えられる。銀行及び監督当局は、代替値の活用や粒度を下げるコスト・便益を慎重に検討すべき。または、公表データの活用などにより、定められたCSAの目的を達成することができる適切な粒度レベルを考慮すべき。

2. ディスカッション・ペーパーの概要

(2) CSAの用途別の考慮事項(6/7)

バランスシートの前提条件 — Balance sheet assumptions

- 選択された時間軸におけるバランスシートの展開に関する前提条件は、CSAの結果に影響を及ぼし得る。一般的に、バランスシートについては、現在の水準で一定とする(静的)、又は時間軸を通じて調整する(動的)前提が用いられる。いずれのアプローチも気候リスクを評価するための目的に応じてメリット・デメリットがある。
- ✓ 静的バランスシートでは、銀行のエクスポージャーの規模、構成、及びリスク・プロファイルは一定と仮定するため、リスク削減にかかる経営上のアクションの効果を考慮しない脆弱性の規模を評価するのに適している。
- ✓ 動的バランスシートでは、リスク削減にかかる経営上のアクションの効果を評価するのに適している。
- バランスシートの前提条件の選択は、CSAの目的に依存。シナリオの基礎的な前提条件とどう相互作用するかを理解すべき。

2. ディスカッション・ペーパーの概要

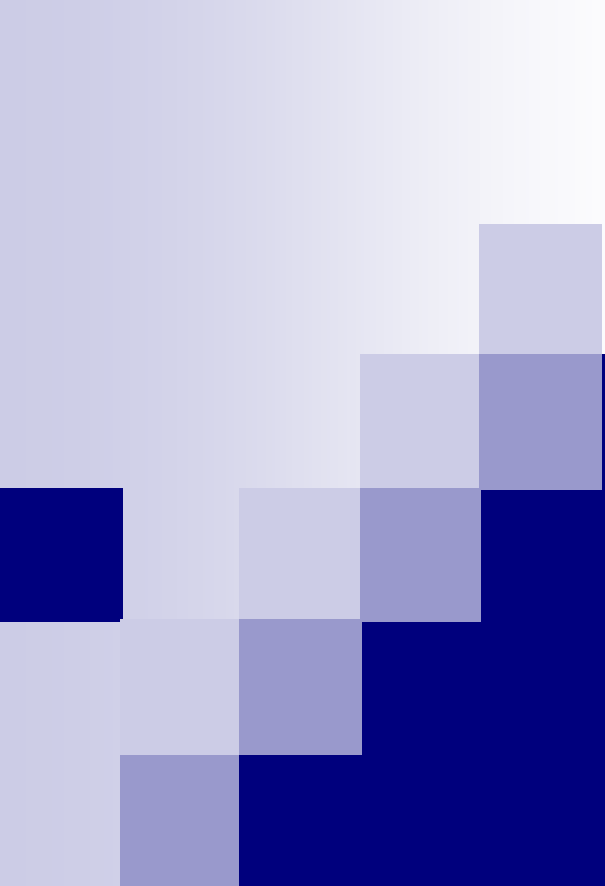
(2) CSAの用途別の考慮事項(7/7)

分析の枠組み — Analytical frameworks

- 多くのCSAは、伝統的なストレステストの枠組み及びリスク指標に基づいている。これらの伝統的な枠組みは、一般的にマクロ経済シナリオ変数を通じて伝達される一時的なショックと、特に収益・費用・損失及び引当金の推計を予測するモデルと組み合わせるように設計されている。これらは、気候関連金融リスクの潜在的な影響を分析するための初期段階としては妥当であった。
- しかし、銀行や監督当局がCSAに対するアプローチを進める中では、過去の経験と切り離れた、構造的な関係进行评估することが目的となる。従来の手法がこうした目的に適しているかは疑問視されており、新しいモデルや指標が必要となり得る。

例：ヒストリカルデータを用いて測定されたストレステストのモデルは、過去の関係や相関関係が将来も維持されるという前提に依拠している。

- また、長期的な構造変化の下での銀行のパフォーマンス、リスク及び存続性の評価を容易にするため、代替的な枠組み(機械学習、AI、ビックデータ分析との統合など)を開発する必要があるかもしれない。



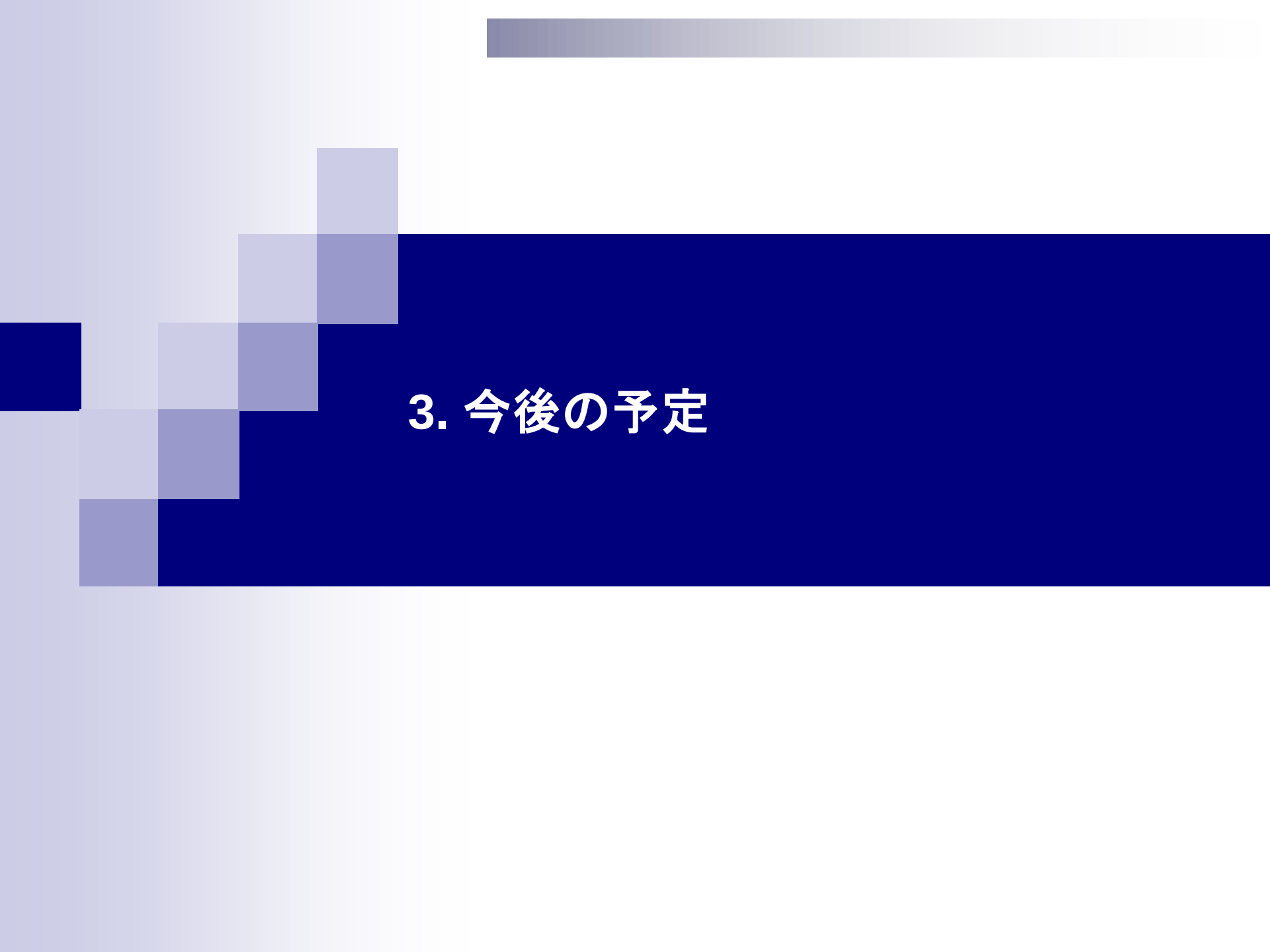
2. ディスカッション・ペーパーの概要

(3) 質問事項

2. ディスカッション・ペーパーの概要

(3) 質問事項

質問番号	内容
Q1	CSAの役割は、本文書に記載されている目的に基づいてどのように変化するか。また、CSAが関連し得る、その他の健全性にかかる目的はあるか。
Q2	CSAの適用における主な課題は何か。また、それらの課題をどのように克服するか。
Q3	CSAの手法と能力を更に発展させて、本文書に記載されている目的に役立つようにする必要がある主な分野は何か。
Q4	主な特徴は、一連のCSAの中で適切に調整されているか。また、その他の特徴も検討する必要があるか。
Q5	CSAの設計は目的によってどのように異なるか。それぞれの目的に対する主要な用途別の考慮事項を詳しく説明してほしい。
Q6	本文書に記載されているCSAの目的に関連する、追加の用途別の考慮事項は何か。また、その理由は何か。
Q7	本文書に記載されている異なる目的に対して、どのシナリオ及びシナリオの特徴が使用されるか。(すなわち、内部で開発されたもの、シナリオ開発者からのもの、またはその2つの組み合わせ)
Q8	現在利用可能なシナリオ(例えば、NGFS、IEA、IPCC)の有用性を高めるために、将来どのような特徴及び対応策を採用することができるか。
Q9	監督当局はCSAに関してどのような代替的又は新規のアプローチを検討することができるか、また、これらは健全性にかかる目的のためにどのように利用されるか。
Q10	監督上の取組みの実効性と効率性はどのように改善され得るか。



3. 今後の予定

3. 今後の予定

- 本ディスカッション・ペーパーに対するコメントは、令和6年(2024年)7月15日までに以下のBISのウェブサイトにて英文でご提出ください。

<https://www.bis.org/bcbs/commentupload.htm>

- コメントは回答者が機密扱いを希望しない限り、すべてBISのウェブサイトに掲載されます。